

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会 事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

博物館の未来は

北海道博物館協会会長
北海道開拓記念館館長 丹保憲仁

博物館とは何だろうか？ 色々あってもいいし、それを国としてことさらに決める必要もないと新しい政権（のたまたま衝にあったひと）は思っているようである。地方分権改革推進委員会第3次勧告の云う博物館登録の要件、資格の廃止又は条例委任の提言の文言である。

規制緩和を論ずる際の枠組みに複数の規制枠の種類がある。経済の自由競争を一方向に開いて唯ひたすらに自由化を進め、産業資本の活動を置き去りにすることに充分の注意を払わず、金融資本の活動を大きくし過ぎてしまって、現代経済社会はその後久しきにわたり往時の暴走に悩んでいる。

社会が認める枠組みとして、活動領域XはAフレーム（保護規制）よりも大きく、しかも、活動の本質が変わるかもしれない領域を示すBフレームを越えてはならない（外縁規制）であろう。この場合フレームAをなるべく小さく摂って諸活動の自由度の拡大を期待するけれども、小なりといえどもAフレームの存在が求められるのは社会の必要認識（特に非営利的諸活動）や政治の心許ないばらつきからの諸活動の最小限の保護であろう。

金融バブルによる実体経済を伴わない金の流れの暴走はBフレームの問題であろう。博物館の規制緩和がBフレームの問題として認識されることはほとんどなく、フレームAの問題に終始するよう思う。歴史的経路経過のうえで、国際的な広がりの中で成立してきた近代の様々な機構がある。

ずいぶん回り道をしてきたが、博物館のことに戻ろう。博物館といった我々が働いている機構も、典型的な近代国家の標準的装備である。学校教育の普及高度化によって、「一定の手順に依れば一定の結論に至る」という、人の好奇心を満たすことを初期駆動力とし、知識・観察の汎用的理解を志した近代科学が、学習可能文明として定着し、諸産業を駆動する知識基盤として応用拡大されて世界を動かし、次々と精密化し先端化した。科学

技術の先端化は、結果として技術社会の細分化を進め、細分化された先端部分では知的探求を続ける人間の科学的活動と、社会へ諸知識を応用し生活の利便を高める活動といった二つの活動が、「科学技術」として時には他の要素を介在させずに知的活動空間のみで直接（短絡）ループを描き、科学技術という合成語（単語・行動）が矛盾を感じることなく使われるようになった。そのループには人間や諸生物の挙動が直接的に含まれることの必然性を求めない事態すらあって、先端科学技術分野における人間の倫理規範が深刻に語られる。

科学は、芸術と同じように人の感性に発し、理解を秩序化する哲学という試みを持った、人の知の地平を拡大する試み（展開と収斂）である。科学は、ニュートンが慣性の法則を「単純化された真空空間の下での孤立した質点の挙動」として世に示したことを嚆矢として、近代科学社会を引き起こした。要素科学（原理）の次々の確立が3世紀にわたり続き、近代科学の基礎が多数の点（小領域）の集合として出来てきた。その由来からして科学は分科的であり原理的である。

その一方、技術は、ある明確な目的があり、あらゆる知識や観察を総合して目的に至るといふ、目的具体化の試みである。人間の知識総合の挙動であり、近代科学以前からある長い人類の営みである。人はそれを歴史学・考古学といった形で今に伝えている。近代科学、近代技術の助けを借りて、歴史学も考古学も大変に確からしく過去を語れるようになった。

美術館、動物園、植物園といった博物館に人は何を期待し、何を求めるのであろうか。考古学的資料の発掘と解釈・解明のTV番組や博物館展示に人はどの様な事を期待し、何を求めるのであろうか。マーケットに流通する「品（しな）」として、それらを見ているのであろうか。動物園、植物園には生態系の貴重種や絶滅危惧種を保護育成すると云った機能もあり、時折TVでそのさわりを見る事があるが、その本体の大部分はどの様なものなのか。公私の美術館は個人では見る事の出来ない芸術作品を人々が堪能する機会を提供する。近代以前には王侯貴族だけが所有と鑑賞の欲望の双

方を満たすことが出来た。鑑賞には相応の知識が不可欠であり、その中から卓越した美の評価・表現能力のあるジレットがでた。王侯貴族に雇われたあまたの天才が中世近世には活躍した。

技術社会の展開と民主主義的社会体制の世界化によって、学校教育が高等教育レベルまで普遍化し、文物の私的独占が難しくなり（時には禁止され制限され）、公的所有化が進んでくると、15-16世紀位までは個人の資力と才能に依った科学・芸術的活動も教育システムの整備と共に次第に職業的芸術家・科学者の集団が、国家・社会組織の下に大量に存在し、公的報酬によって支えられる職業集団として世の一角を可成りの大ききで占めることになる。

世界人口の猛烈な増加は、相対的に野生動物の極少数化をもたらすこととなり、一定レベルを超えた美術作品は希少価値を持つ投機の対象となり、動物は家畜以外は動物園で見られるものとなる。貴重な文書や遺跡のたぐいは、テレビや出版物で見ることが出来ないものとなり、テレビや新聞に登場しない事柄は存在さえ知られない事になる。

中世のような宗教的価値が様々な価値体系に卓越した時代や、現在でも政教分離という西欧近代の規範が普通でない空間では、司祭、導師や神官といったリーダーが様々な活動を導く。現代を生きていくための教育課程を主にした学校教育ではほとんど扱われてこなかった、歴史的・考古学的遺産、多様な美術工芸作品、文書類、自然史、産業史の諸資料・生物群集などを社会の教育学習資本として扱っていくためには、専門化が可成りの程度まで進んでしまった現代では、一定の基礎教育と専門的訓練をうけて能力の保証されている人々を、あるレベルの博物館環境のもとで相当期間研鑽を続けた上で、一定数の導師（リーダー）として存在させることが不可欠である。学問的な教育研究や産業における諸活動を高度に担った人々の博物館導師としての参入もまた重要である。それを単に学芸員というかどうかは未だ議論があるように思うが、今のシステムでは学芸員以外にこの役割を果たす職種は見あたらない。専門性は当然磨かれなければならないが、「博物学」枠ほどの広がりを持った現代の導師・神官・司祭といった役割を想像すれば、時代錯誤的ではあるが何を求めたいかが乱暴ではあるが想像できるかもしれない。

小中学校の教師は専門性がなさ過ぎるし、時間を研究に使う余力も基礎訓練も受けていない。大学教師も現代の教育体系の中では分科的専門基礎教育と専門分野の大学院レベルの研究的プログラム教育で精一杯である。先端科学の少なからずの部分は、科学と技術の短絡経路の中において人に関

わる機会を持ち難くなっている。人間社会と自然の関わりを人類が近代社会を始めた200-300年前の時にさかのぼって、古い時代まで振りかえり、200年先を未来の歴史としてじっくりと新時代のために学び、人々の学びの核となることの出来るのは、研究的機能を持ち、社会に成果を公開し続ける歴史博物館、自然史博物館、科学博物館、美術館、動物園、植物園、文書館、産業博物館などの整備された組織、または選び抜かれた専門博物館の学び抜いた学芸員、もしくはそこへ転入してきた高度の学識者などが務めるスーパー学芸員ではないかと思う。新展開してくる文明の新職種たるスーパー学芸員（新たな名称がいりそうである、Museum Professorなど）が、当然の事ながら、博物館のリーダーを務めることになるであろうし、その下で様々な職種の管理者、研究者、技術者が力を合わせて働くことになるであろう。

郷土資料館はそういう機能を期待される博物館ではない。鎮守の森は心のよりどころであるけれども、文明の持続、創生の拠点となるには力不足である。しかしながら、そこで地域と向きあって博物館的機能を培ってきた学芸員の経験と成果は、通り一遍のサラリーマン的勤務をしてきた博物館勤務者とは筋金が違う。ネットワークとしての博物館群の連携挙動がどうしても必要である。スーパー学芸員は現代の導師であり、地域のリーダーである。その評価、待遇、組織化がまたれる。学芸員の資格は比較的に獲得容易であるけれども、社会での通用性、評価、尊敬がローカルにしか得られないのは残念である。

相対的に一定の質を保証する諸「学芸員」資格、その社会的信用と指導性の確保と、その活動を国内的にも国際的にも保証する国の役目の明確化である。博物館のレベル表示など未だネーションステーツが世界秩序の主要構造になっている近代がまだ有用な段階では、国以外に広域に長期的に博物館の歴史的位置と国際的信用を維持する直截な方策はない。一定レベルを要求する登録博物館と学芸員を地域が持つかどうかは地方自治体や、設置主体の決めることで、そのあるべき水準は最初に述べたカテゴリーAの基準で、国際的な水準まで考えて国が定めるべきであろう。博物館にはカテゴリーBの規制はない。21世紀後半はマスプロ高等教育に代わって、繰り返しの生涯学習の充実に進むであろう。中核となる博物館の学芸員はこのままでは力不足であり、分散孤立する諸資料館はその任に耐えない。学校教育と別体系の博物館群のシステム化がスーパー学芸員（現代の導師：教師ではない）の創生と真の意味の登録博物館のカテゴリー化と適切な地域展開で次の時代を開きたいものである。

石狩・後志
空知地区
News

黒松内町ブナセンター ブナホール改修しました

黒松内町ブナセンターは、黒松内の自然や文化の情報を収集し発信する博物館としての機能と、黒松内町が推進してきた「ブナ北限の里づくり構想」のテーマである「都市との交流」の機能とをあわせ持つ施設として、平成5年に開館しました。館内には、北限のブナや瀬棚層の化石、黒松内の歴史に関する展示ホール（ブナホール）、木工、陶芸、食品加工が体験できる3つの工房、自然に関する図書コーナー、最大30名収容の会議研修室などがあります。開館してから17年間、教育普及や



平成21年度は、ブナセンターの外装も改修しました

旬の情報発信には力を入れてきましたが、ブナホールの展示内容はほとんど手つかずのままでした。

平成21年度、(社)北海道観光振興機構の「地域観光商品開発促進事業」に申請した『ブナの森の音楽会』という事業が採択され、ブナ材の手回しオルガン（大きなオルゴール）をブナセンターに導入することができました（平成22年度には、森の中で手回しオルガンのコンサートを予定）。これをきっかけに、これまで解説パネルが中心だったブナホールを、ブナの音を聞き、ブナに触れて楽しめるホールに改修するという考えを提案し、運良く実現にこぎ着けました。

ブナホールは、故障していた映像機器を撤去してできたオープンスペースに大型スクリーンを設置し、コンサートや講座、企画展示ができるホールとして整備し、ブナ材でできた家具やおもちゃに触れて楽しめるコーナーも設置しました。また、これまでの展示内容に加え、現在黒松内をフィールドに調査研究を行っている研究者の研究や町民主体で取り組んでいる自然環境保全活動（黒松内岳ブナ林再生プロジェクトなど）を紹介するコーナーを追加しました。今後、このホールを活用しながら、黒松内のブナ林や自然への入り口としての機能を高めていこうと考えています。

（黒松内町ブナセンター 学芸員 齋藤 均）

道南ブロック
News

健脳講座の取組みについて

数年前から冬季間の事業として開催してきた「写真と流行歌で綴る昭和の時代」という題名の健脳講座を今年も実施した。

この発端は、当町の社会教育係から冬の高齢者学級の地域教室講座に何かないだろうかかと相談されたことがきっかけだった。

以前から来館するお年寄りが、昔の道具を見ては蘊蓄を語ったり、若い頃の話を楽しげに話すのを見ていて、脳の活性化に役立つのではないかと漠然と考えていた。

7年位前から試行的ではあるが保健師と共同で保健センターのリハビリ教室で古写真をスクリーンで見せながらその時代の歌を流すようなこともしていた。その時の反応が良かったこともあり、社会教育から依頼されたのをきっかけに本格的に取り組むことにした。

また、当館では、健脳講座「知内学のすすめ」という名称で中高年向け会員制の講座を実施しているが、本事業はそれよりもさらに年齢層が上であることと対象が不特定多数なので、単純に懐メロをバックに終戦前後の地元の写真や映像を見て

もらいながら、その当時の生活の様子を聞いたりして過去を回想できるようにしている。

歌を口ずさむ人や写真に出てくる人の話で笑い声が絶えない。また、農村・漁村・市街地など地域ごとの違いが鑑賞のし方に現れて面白い。

なかでも一番受けるのが教師の写真である。即座に〇〇先生！と出てくるのである。それも自分の習った教師だけではなく他の学年の教師でさえ名前を覚えている。そして出来事を話してくれるのを聞いていると、子どもと教師との関係が密接だった時代を伺える。比較して今どきの子どもと教師の関係がいかに希薄であるのかを思い知らされる。

それにしても60年も前の写真だと、写っている当人もあやふやで、他人から「あなただよ」と教えてもらうようなこともあり笑いを誘っている。

地域ごとに写真を選定し、撮影場所や年代を調べたり撮影年に流行していた歌を選んだりするので準備には時間がかかる。また、毎年同じ写真では芸がないので少しずつ交換しながら、あるときは映像を活用しつつ飽きさせないようにしている。

このようなことが素人でも容易にできるようになったのは、パソコンの性能が格段に向上したおかげであることを実感している。

（知内町郷土資料館 学芸員 高橋豊彦）

道北3管内
News

博物館に足跡を残す

森の学校「中川町恐竜化石発見調査」は、中川町で恐竜を発見するという目的でフィールド調査を行う3泊4日の事業で、来年10年目を迎える。森の学校では、朝の活動で歩測の訓練を行う。もちろんフィールドでの距離感を養うためであるが、同時に恐竜の歩行について学ぶためでもある。歩く時と走る時では歩幅も足の裏への体重のかかり方も違う。自分のつけた足跡を観察し、恐竜の足跡化石がどのような物語をもっているのか想像するのである。2008年の森の学校では、小型の二足歩行恐竜の歩行時と走行時の足跡を用意し、2グループで好きなようにストーリーをつくって博物館内に恐竜を歩かせてもらった。玄関から博物館へ続く二頭の恐竜の足跡。二頭の足跡が交差し、走り出している。走っている時は歩幅も広がっているし、なかなか勉強の成果が出ている。足跡は森の学校4日間の成果を展示したケースの前で終わっていた。

文字通り「博物館に足跡を残した」参加者であるが、2009年も参加したりピーターは無残にも破れ剥がれた足跡を目撃することになった。足跡は



足跡を作成中の森の学校参加者

つけられた後、少なくともすぐ埋没しないと保存されないのである。足跡が化石として残る偶然性、そして時を超えて我々の目の前に現れる奇跡。そこに生きていたという“足跡”を残すのも大変なものである。さて今年の森の学校では、どんな足跡を残されるのだろうか。

(中川町エコミュージアムセンター

主査 足田吉識)

日胆地区
News

研修会「博物館で学ぶ」を開催

日胆地区において毎年開催している研修会が9月17・18日にのぼりべつ文化交流館カント・レラ(登別市)で開催されました。テーマは「博物館で学ぶ～楽しみながら学べる場所作り～」と題して、「博物館教育」とはどのような考え方なのかを体験学習等の事業を通して、楽しみながら学びを深めることのできる博物館の姿を話し合いました。

今回の研修会は、博物館関係職員だけでなく、博物館ボランティア等の市民の方にも参加しても



パネルディスカッションの様子

らい、ともに学ぶ機会を作ることも目的の一つでした。それは、博物館の運営が学芸員だけでなく、多くの地域の方々の協力のもとに成り立っており、博物館の理念である「博物館教育」をともに学ぶことで、よりよい博物館の姿を教育の視点から探っていくことができると考えたからです。

研修会では、百瀬響准教授(北海道教育大学)にスミソニアン博物館の事例から博物館教育の重要性を、そして角田隆志学芸員(洞爺湖町教育委員会)、池田小夜美学芸員(苫小牧市博物館)、伊藤昭和学芸員(浦河町立郷土博物館)によるテーマ別体験学習の事例発表の後、百瀬准教授をコーディネーターとして発表者とパネルディスカッションを行いました。ディスカッションでは、体験学習プログラムにおける注意点や問題点、また目的などについて発言があり、これらを共有することで、何らかの形で博物館活動の中に反映させてもらえるのではないかと感じました。また、地区の研修会としての新たな取組みとして、テーマに沿ったポスター展示も実施し、発表館以外の活動を参加者に知ってもらえる機会にもなりました。

博物館の価値を高め、地域の博物館自体への関心を高めていくためにも、今後もこのような市民を巻き込んだ活動を積極的に行っていくことが必要と考えます。

(登別市教育委員会 学芸員 菅野修広)

道東3管内
News

特別展 「思い出の標津線」

中標津町郷土館では、平成元年にJR標津線が廃止となって20年目を迎えたことから、今年度の特別展を「思い出の標津線」と題し、平成21年10月6日から22日までを中標津町総合文化会館で開催し、次いで平成21年12月1日から3月22日まで、中標津町郷土館で開催しました。

展示内容は、施設の都合により同じ構成ではできなかったため、第1弾であった町総合文化会館では、国鉄開通前まで開拓民の重要な“足”であった殖民軌道を含めて取り上げ、標津線については、開通当時から廃止に到るまで、そしてフィールドワークによって得られた、今もわずかに残る標津線の名残などの各種写真やパネルを中心に構成し、



「中標津町総合文化会館のようす」

さらに廃止の際に沿線市町が合同で製作したビデオの上映を随時おこないました。

第2弾となる町郷土館での展示は、かつて標津線で使用されていた実物資料を中心とした内容に再構築しておこないました。特に、標津線を走っていた代表的な車両の鉄道模型（Nゲージ）を揃え、簡単なレイアウトではあるものの見学者が操作をできるコーナーを設置したところ、子供のみならず、大人にも大変好評で、「特別展終了後もぜひ残して」という声をたくさんいただきました。

また、管内は違えど、同じ道東3管内の会員である標茶町郷土館でも、同年度内に標津線の巡回展を開催する予定であったことから、両館では情報交換やデータの共有などをおこない、より充実した展示につなげることができました。今回の連携により、近隣市町村における展示協力のヒントが得られたことも大きな収穫でした。

さらに、今回の特別展については、町内外、ひいては道外の鉄道ファンから様々なサポートを頂きました。当館では広報の手段としてインターネット（ホームページやブログ）を活用していますが、その力を再確認したところでもあります。今年度は、長期間の天候不順や新型インフルエンザの流行により、入館者減は避けられなかったものの、年度を通して各種広報活動を随時おこなったことや、鉄道ブームという後押しにより大勢の方に来館いただきました。

（中標津町郷土館 学芸員 山宮克彦）

網走管内
News

博物館 網走監獄 「監獄歴史館」リニューアルオープン

明治23年網走村に網走監獄が設置されました。その10年後の明治33年に網走区裁判所が設置されました。地方の村に行刑施設と司法施設がそれぞれの役割を担い歴史を刻んでまいりました。当館はこれら施設の旧建築物を移築復原し、北海道開拓の礎として北海道集治監の果たした功績を行刑資料とともに保存公開をしています。しかし開館から26年、建築物の移築復原、再現事業を最優先で行ってきたため資料館の展示は開館当時のまま大幅な展示替えもなく月日が立ってしまいました。その間、博物館の展示手法、利用者のニーズ、博物館に求めるものも様変わりしました。

また、博物館を取り巻く環境も厳しい現実に直面しており入館者の減少が続いていました。

どうしたら活気あふれるミュージアム、地域に必要とされる施設として存続できるのか、役職員で議論を重ねた結果、網走刑務所が創立120年を迎えることと、当財団も創立30周年にあたるこのタイミングに資料館のリニューアルを行うことにしました。そして本年2月1日「監獄歴史館」として新たな1歩を踏み出しました。

新しい歴史館の展示コンセプトは、網走監獄

120年の歴史を時間軸で構成し、明治政府が北の守りを固める為、屯田兵入植と軍用道路の開削という政策を北海道集治監に求めたという史実、特に網走監獄が行った中央道路開削工事に光をあてた展示を中心に据え、比較展示として100年続いた監獄法が新しい法律となり、新法に則った刑務所の今の姿、現在の刑務所内部を伝えることを展示構成にしました。展示手法としては、国際化に合わせ、ユニバーサルデザインを指標し解説文も日本語、英語、韓国、繁体語、簡体語の5ヶ国語解説を備え、参加体験展示並びにハンズオンも導入し、あらゆる層の人々に理解しやすいものとなりました。また、網走市民の人々にも展示に参加して頂き、地域との交流により歴史的背景が一層浮き彫りになりました。この歴史館オープンを機に、入館者減小に歯止めが掛かることを願い、役職員一丸となり、来館者の視線に心を寄せて満足頂ける、多様性に富んだ博物館運営に取り組んでいます。



監獄歴史館オープンセレモニー

（博物館網走監獄 学芸員 今野久代）

動物園・水族館
News

伸びろ、ツララ

こんなに暖かくなったのにツララなんてどこにあるの？と思われたかもしれませんが、これは家の軒先にある氷柱のことでなく、昨年生まれたセイウチの仔の名前です。北極海に生息し、体重1.5トンにもなる海獣、セイウチ。他の海棲生物同様、その生態はあまりよくわかっていません。繁殖例も少なく、日本では小樽水族館と千葉県の鴨川シーワールドのみです。小樽水族館の繁殖では今回が4例目の繁殖ですが、2例は死産で、成功例としては2例目です。昨年1月に、母親のウーリャのお腹が大きいと気づき、酪農学園大獣医学部に超音波診断をしていただき、妊娠が判明しました。4月には出産準備のため、父親のウチオとウーリャは一時的に別居。これまでの経験から、過剰な観察や撮影はストレスになるので行わ



セイウチ親子
左から父ウチオ、
娘ツララ、
母ウーリャ

ず、ウーリャが安心して出産できるように心掛け、静かに見守りました。そして5月31日朝4時、ついに生まれました。雌です。ウーリャは2回目の子育てのせいか、余裕がありました。ツララをプールへ連れて行き、泳ぎを教えます。おっばいも良く出ていたのですくすく育ち、1ヶ月後には体重は2倍の80kgになりました。来館者から名前を募集し、ツララに決定しました。名前の由来は、冬のつららのようにすくすく伸びてほしいことと、セイウチの牙（犬歯）がつららに似ていることからです。更に3ヶ月後、いよいよ父親のウチオとの同居開始です。大きさがあまりにも違うので、最初は心配でしたが、ウーリャがツララをしっかりガード。かかあ天下です。ウチオも背中にツララを乗せて泳ぎ、親子の微笑ましい光景に来館者の皆様も私たち飼育員も笑顔がこぼれます。

そして今、ツララは二まわりほど大きくなり、200kgを超えました。この調子ですくすくと成長して行ってほしいと思います。このセイウチたちは、昨年話題になった動物園のホッキョクグマ同様、北極圏に生息しています。マスコミでよく取り上げられますが、ホッキョクグマ同様にセイウチも地球温暖化の影響が懸念されます。かわいい赤ちゃんの誕生を喜ぶだけでなく、それを通して来館者の皆様に地球環境や自然について興味を持っていただき、ひとりひとりの行動に繋げていくことが私たち水族館人の役目だと思っています。
(小樽水族館 海獣飼育課 角川雅俊)

学芸職員部会
News

「ふるさとの雑魚たち」

「兎追いし彼の山 小鮒釣りし彼の川」。誰もが耳にしたことのある童謡の中で歌われるふるさとの川。私たちの身近にある水辺には、ふるさとの雑魚たちが泳いでいる。

フナに代表されるふるさとの雑魚たちの多くは、一生を淡水域で暮らすことから、海を通して隣の川へ移動することができない。そのため、長い歴史の中で、異なる淡水環境に適応し、地域ごとに固有の特徴を獲得していった。「あの川の魚は、特に色が綺麗だね」。釣師の間でそんな話をよく耳にする。とりわけ、地理的変異の大きい雑魚たちにとって、色彩や形の違いは顕著だ。かつては、これらの違いを形態学的に比較してきたが、近年、大きな発展を遂げた系統地理学によって分子生物学的手法が加わり、個々の分布形成や進化の歴史、さらには地域固有の淡水魚類相の謎に迫るようになった。

私達の住む北海道には、ヤマメやアメマスをはじめとしたふるさとの雑魚が泳ぐ。その中で、一生を川で暮らす北海道固有の雑魚といえば、ヤチウガイ、エゾホトケ、フクドジョウの3種が挙げ

られる。特に、ヤチウガイは、湿地を意味するヤチの名前を持つことからわかるとおり、平野部の池沼や河川下流域の水の流れの穏やかな場所に暮らしている。人の暮らしの中心も平野部にあることから、彼らは身近な雑魚と言えるだろう。

しかし、身近な水辺環境は、農地拡大や河川改修によって、かつての姿とは大きく変わった。家の近くにあった沼は消え、川はまっすぐ海につながる。それと同時に、雑魚たちは姿を消していく…。さらに、水産業上の理由や保全を目的とした善意の結果、意図的もしくは非意図的な理由で、本来の生息地を越えた雑魚たちの移動が行われるようになった。このままでは、彼らの住み場所はおろか、長い歴史の中で獲得してきた固有の特徴すら失われてしまう…。

こうした中、博物館は、何ができるのだろうか？

展示会や学習会を通して雑魚の面白さを発信することができるだろう。彼らのことを調べることもできる。そして、なによりも、資料として未来へ残していくことができる。

私もその一翼を担うようになり、2年が過ぎた。まだまだ駆け出しだが、使命感に燃えている。とりわけ、食べることも、釣ることも、見ることもほとんどないヤチウガイのような、ふるさとの雑魚を大切にしていきたいと思っている。

(美幌博物館 学芸員 町田善康)

青少年科学館
News

科学館と博物館を楽しもう！ 「かいじ探検隊!!」を開催

厚岸町海事記念館は、昭和63年10月に開館した博物館と科学館の複合施設です。当館は、江戸時代から鯨漁や鮭漁で栄え、昆布漁や捕鯨、牡蠣など、海との関わりの深い厚岸町の歴史を学習できる博物館として、そして、プラネタリウム室（直径10m、全85席）をもつ科学館としての役割を担っています。

最近の取り組みとしては、博物館と科学館とい



スタンドグラスを真剣に作る子供たち

う二つの性格を兼ね備えた特性を活かし、博物館と科学館を存分に楽しもうということで、2月20日（土）に冬の工作教室「かいじ探検隊!!」を開催しました。当日は会場を4つに分け、①「スタンドグラスをつくろう♪」、②「ほしぞら☆さんぽ」、③「9uiz (クイズ)」、④「絵はがきを探せ〜!」を実施。①「スタンドグラスをつくろう♪」では、台紙に取り付けた偏光板とセロハンテープを幾重にも貼ったプラスチック板を利用してのスタンドグラス作り。光の屈折から七色に変化する光の不思議を体感でき、子供たちにも大好評。②「ほしぞら☆さんぽ」では、冬の星座の説明と宇宙ステーションをテーマにしたクイズを出題。③「9uiz (クイズ)」は展示室を探検しながら隠されたアイテムを探し出す体験型クイズ。また、④「絵はがきを探せ〜!」は現在開催中の当館特別展「絵はがき再発見」とタイアップし、展示している絵はがき資料を利用した絵はがき合わせを楽しみました。最後には、参加した子供たち全員が全てのコーナーを制覇し、「全問正解賞」をもらって笑顔で帰って行きました。

一人でも多くの子供たちが、当館のリピーターとなり、子供たちがいつでも集える場所としての地域博物館・科学館となることを職員一同目指しながら今後も活動していきたいと思っています。

(厚岸町海事記念館 学芸員 車塚 洋)

道美学芸研
News

第18回北海道美術館 学芸員研究協議会報告

3月4・5日、北海道立近代美術館において、第18回北海道美術館学芸員研究協議会が開催された。全道の美術館・博物館学芸員や研究者からなる71名に今年は2名の新会員が加わり、初日は会員59名とオブザーバー9名が参加。総会に続く研究協議は、昨年から引き継ぎ「コレクションの活かし方を考える」をテーマに進行。冒頭佐藤副会長は、地方分権改革推進委員会第3次勧告における博物館法第12条の博物館登録要件の廃止または条例委任という勧告は、国による博物館のあるべき姿のスタンダードが失われ、地方の美術館、博物館がイベント会場化されていくという危機的な状況にあることを説いた。この提言によって、これまで学芸員が等しく基本事項として学んできた調査・研究、収集・保存、展示・教育という博物館機能の意義を再認識することとなり、コレクションをめぐる協議が一段と重要性をもって、参加者の緊張感も高まった。前回行った会員によるワークショップの報告に次いで、事例報告として近代美術館の「今田資料」を整理し活用した展覧会、帯広美術館の「はな展」における芸術の森美術館との連携、芸術の森美術館のコレクション展

示の方法とグッズ展開の工夫の報告。初日最後は、DNPアートコミュニケーションズより、「美術館におけるデジタル展示ソリューションの可能性」と題しルーブル美術館と連携し開発されたさまざまな体験型デジタルツールシステムを紹介。2日目、研究発表は苦名学芸員（三岸美術館）の「北海道美術史エピソード 道展創立のころ」、岡部学芸員（木田美術館）による「島本融の眼：北海道銀行コレクション」に次いで来年度開催される吉崎学芸員（芸術の森美術館）の「なかがわ・つかさと札幌の美術」の、それぞれ展覧会に活かされる研究成果が発表された。最後に早稲田システムより、ネット上で情報交換が可能な「学芸員オンライン」の紹介があり、充実した日程を終えた。

コレクションと研究あつての美術館、博物館の理念はこれからも揺るがしてはならないはずだが、今回のような勧告がなされるような時代、理念を守るというより、あらたに創り上げなければならない時代になってしまうということだろうか。あいかわらず私たちは、粛々と自らの責務を果たすのみである。



(北海道立近代美術館 主任学芸員 久米淳之)

第49回北海道博物館協会大会 (50周年記念大会)
「博物館の将来像について語ろう」
開催のお知らせ (予定)

北海道博物館協会が設立されて50年の節目の年にあたり、会の現状を確認し、将来にむけて「道博協」がとるべき進路について全体的な議論をおこないます。

これまで道博協は、博物館どうしの「連携」を支える組織として機能してきました。しかし近年は、加盟館減少の問題に象徴されるように、「連携」のメリット、あるいは「連携」のあり方に対し、問題が投げかけられるようになっていきます。単なる「ネットワークの構築」＝「連携」以上の役割が、道博協には期待されていると言えるのかもしれません。

これまで各博物館は、展示や普及事業の連携、学校教育との連携、情報交換など、さまざまな「連携」の形を模索してきました。道博協には、各地区ブロック（連絡協議会）のほか、館種別の分科会や学芸職員部会等の組織があります。各組織間どうしの「連携」については、新たな可能性を秘めていると言えるでしょう。

そこで、50周年記念大会では、道博協のこれまでの役割と現状を再確認するとともに、道博協のネットワークを活用した異種館どうしの連携（コラボレーション）のあり方を議論することで、博物館の将来像を探るべく、広く会員からも意見を求めたいとおもいます。

■日時：平成22年7月9日（金）・10日（土）

■大会テーマ：

「博物館の将来像について語ろう」

■大会の全体的な流れ

【一日目】

7月9日（金）

・午前 総会

・午後 シンポジウム

※会場：北海道開拓記念館 講堂

【二日目】

7月10日（土）

・午前 博物館等見学研修

※札幌市内の博物館等をモデルコースに沿ってご見学ください。例年実施しているバス見学会は実施しません。

・午後 記念講演会

※会場：北海道立近代美術館 講堂

■シンポジウム（大会一日目午後）の内容

*日 時：7月9日（金）

*テーマ：「博物館のコラボレーションについて」（仮）

*会 場：北海道開拓記念館 講堂

*内 容：博物館、美術館、動物園・水族館、科学館の4つの館種からそれぞれ1名ずつ報告者を立て、連携事業の事例紹介を中心に報告を行い、異種館どうしのコラボレーションの可能性を探ります。報告者は、若手～中堅の職員を立てる予定です。

パネラー1（札幌芸術の森美術館）

パネラー2（札幌市環境局円山動物園）

パネラー3（札幌市青少年科学館）

パネラー4（道内歴史・自然系博物館より）

司会（検討中）

■記念講演会（大会二日目午後）の内容

*日 時：7月10日（土）14:00～15:30

*テーマ：未定

*講 師：池澤夏樹氏（作家）

*会 場：北海道立近代美術館 講堂

*内 容：博物館関係者のみならず、一般市民の方がたに博物館や道博協をアピールするための記念講演会を開催します。札幌在住の作家・池澤夏樹氏を講師にお招きし、道民とくに子どもたちが、博物館や美術館、科学館、動物園、水族館などに興味を持ち、足を運びたいような内容での講演をお願いしているところです。

〔参考：関係する池澤氏の主な著作〕

『見えない博物館』（平凡社、2001年）

『静かな大地』（朝日新聞社、2003年）

※2007年に朝日文庫から再刊

『パレオマニアー大英博物館からの13の旅』（集英社インターナショナル、2004年）

※2008年に集英社文庫から再刊

例年と日程が異なります。また大会一日目と二日目では、会場が異なります。十分にご注意ください。尚、詳細な大会日程につきましては、後日決まり次第、改めてお知らせいたします。